



TITLE:

讀者欄：寄書歡迎

AUTHOR(S):

CITATION:

讀者欄：寄書歡迎. 天界 1935, 15(169): 272-273

ISSUE DATE:

1935-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167009>

RIGHT:

讀者欄 寄書 歡迎

愚 筆 二 題

◇鏡面と人生と◇

私は近頃、日頃の希望二つを満足して喜んで居る。その一つは、中村要氏の反射望遠鏡を得たことであり、他の一つは、氏の名著「反射望遠鏡の研究」を天界舊號を求めることにより完成したことであつた。前者はある人の好意により完成品をゆづられ、後者は矢張り二三の人々を煩はしたものであつた。

今更の様ではあるけれど、中村氏逝いて足かけ三年になるが、鏡面を見るにつけ氏の追憶新たなるものがあらう。

氏の著者の何處かで述べてゐられたが、日本に素人として相當な人は幾人かあらう。今は批評をさけるけれど、何年か後には自然分るであらうと云ふ様な意味のことがあつた。

鏡を作ることの困難はやつてみて始めて分るものである。あれ程の才分と技量に恵まれながら、只惜むべし、人生にめぐまれぬ（こう云ふ言葉はあるかないか知らぬが）と云ふことにより、若くして逝き、しかも今あの氏の言葉が氏自身の上に興へられねばならぬ様な運命になるとは、當時の最も自信あり華々しかつた氏の仕事を想ひ浮べて今日を想像し得る人は果して幾人あつたであらうか。

鏡裏のサインを見ると、この鏡は氏の遺志をついで斯界にいそしまれる K 氏の初期の作品を修正したもので、その由が刻まれてゐる。再び得られぬよき形見であらう。

幾年かの歳月を経て、ある鏡面が浮草の様に人の手から手へと渡り歩き、しかもその途使用者のフトした不注意によつて作られた創の古きにつれて、その鏡の價值は益々貴いものとならうけれど、私はそこに鏡と人生との微妙な一脈の流れの存在するのを見のがすわけには行かない。

とまれ、幾年か後にこの鏡面も私の手からはなれて行くかどうかは私の最

後の日が來なければ斷言出來ぬとして、故人の意志を空しうせぬ爲には鏡の所有者が鏡を最も利巧に用ふることは必要であらう。

鏡面と人生と。人は逝つても鏡はわれぬ限りその生命を保つてゐるものである。

◇ マ 1 ク ◇

天文協會會員證はその年度の會員證として紙片のものを配布されるが、これとは別に會員のマ1クを作られてはどんなものであらうか。エスペランティストに星のマ1クがある様に、我々にも何等かのマ1クがあつてもよい筈である。フト見て協會會員が分る様に。勿論現在の會員證も存在してその上のことである。そうすると別にマ1クから過失が起る様なことがないと思ふ。

[E. M. 生]

私 の 愛 機

—(口繪に添えて)—

拜啓 陽氣も大分暖くなり、天體に親しみ易くなりました。

小生この度、五藤光學研究所に依頼して製作して戴きました口徑 5.4 cm の手動屈折赤道儀が完成致し、假据付と格納庫とが出来ましたので、その寫眞を同封致しました。充分御笑覽下さい。(口繪参照)

四寸角の檜材を地中に約二尺八寸埋め、地表附近を厚さ五寸、一尺二寸角のコンクリートで固めた柱の地上四尺の所に赤道儀頭部を据付けましたので、非常によい安定を得ました。

接眼レンズは 40mm ケルナ 1, 25mm ケルナ 1, 18mm ミテンズウエイ, 15mm オルソ, 12.5mm ケルナ 1, 6mm オルソです。

對物は五藤光學研究所快心の作、直徑 58mm, 焦點距離 800mm の二枚合せ光學色消レンズです。

日下本機により色々の天體を觀望致してゐます。何分にも御教導の程お願い致します。

草々

[東京 服部 博]

一 寸 一 言 を

滿洲では 24 時制のはずなのに、放送局おしまひの時報に、「9 時 30 分……なほ、臺灣と滿洲では 8 時 30 分……」とかつてに換算してゐるのは無作法センバンとおもひます。なほ、臺灣では 8 時 30 分滿洲では 20 時 30 分」といふように、天文臺のケンキもて、おさとしいかか、内地人にも 24 時制にいくぶんなりともなれさせるために。

Hadani.